大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

ピエール・ボエスチュオー研究 (1)
『悲劇的物語集』

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2014-04-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 鍛治, 義弘
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006055

ピエール・ボエスチュオー研究

（1）『悲劇的物語集』

鍛　治　義　弘

1．はじめに

フランス１６世紀の散文物語の展開を概観するならば、世紀前半はボッカッチョの影響を多く受けたもっぱら滑稽味を主眼とするものが主流であったが、世紀半ばのクロード・ド・タイユモン Claude de Taillemont の『仙境恋愛女性談義』*Discours des Champs faëz*（１５５３年刊）、死後出版となったマルグリット・ド・ナヴァール（１５４９年死亡）の『エプタメロン』（１５５９年刊）に含まれる「哀れな話」を経て、世紀後半はバンデッロの話に刺戟をうけた悲劇的な物語が多数となる。この１７世紀まで続く悲劇的物語集[1]、さらには１６世紀後半に流行を見た『驚倒すべき物語集』[2]を実質的に創始したのは、ピエール・ボエスチュオーPierre Boaistuau なる人物であった。２０世紀の最期の四半期からかなり注目をあびるようになり、２０１０年には『驚倒すべき物語集』の批評版が上梓され、主要作品が近代版で読めるようになったこの作家を、これから作品ごとに検討していくつもりである。

2．略歴

この作家の経歴については、ほとんど自身の著作中での言及に基づいており、他の証言はあまりない。現状ではこれまでの研究に付け加えることもないが、日本ではほとんど知られていない作家でもあるので、ド・ラ・ボルドリー[3]、シモナン[4]、Carr[5]、Bamforth[6]の研究に従い、

---

[1]主要な作品に次のようなものがある。
1559　Boaistuau　*Histoires tragiques*
1559　Belleforest　*Continuation des Histoires tragiques*
1572　Jacques Yver　*Le Printemps*
1585　Vérité Habanc　*Nouvelles Histoires tant Tragiques que Comiques*
1586　Bénine Poissenot　*Nouvelles Histoires Tragiques*
1614　François de Rosset　*Histoires tragiques de notre temps*
1630　Jean-Pierre Camus　*Les Spectalces d'horreur où se descouvrent plusieurs tragiques effets de notre siècle*
[2]　主な版は以下のとおり。
1560 Boaistuau　*Histores prodigieuses*
1568 Boaistuau, Tesserant　*Histoires prodigieuses*　Mises en nostre langue par P. Boaistuau, ... Et nouuellement augmentées de quatorze histoires par Claude de Tesserant
1571 Boaistuau, Tesserant, Belleforest　*Histoires prodigieuses*　Le premier mis en lumiere par P. Boaistuau, ... Le second par Cl. Tesserant, & augmenté de dix histoires par F. de Belleforest
1578　Rod. Hoyer　*Le quatriesme tome des Histoires prodigieuses*
[3]Arthur de la Borderie, << Pierre Boaistuau, sieur de Launay >>,　*Revue de Bretagne et de Vandée* VII (mai 1870), pp.359-371 ; (juillet 1870), pp.63-75 ; (août 1870), pp.111-116.
[4]Michel Simonin, << Notes sur Pierre Boaistuau >>, *Bibliothèque d'humanisme et renaissance*, XXXVIII (1976), pp.323-333.
[5]Richard A. Carr, Introduction aux *Histoires tragiques*, éditon critique publiée par Richard A. Carr,

簡潔にまとめておこう。

１５１７年頃の生まれと考えられるが、これはシモナンの発見したナントのサント＝クロワ Sainte-Croix 小教区の洗礼記録において、Gilles Bouexcau と妻 Jehanne の間の息子の洗礼が１５１７年１０月９日付であることにより、現状ではこの息子 P[ier]res がピエール・ボエスチュオーであると考えられている。著作のタイトル頁でもブルターニュ人ナントの生まれと記している。幼少期のことなどは全く不明であるが、世俗法教会法の勉学に進んだようで、１５４０年代から５０年代にかけて南フランスの各大学で勉学したと考えられている。これまた著作の『驚倒すべき物語集』の記述に従うものであり、１５４４年から１５４５年にかけてポワチエで、１５４４年～１５４７年頃ヴァランスでコラス Jean de Coras（１５１３－１５７２）のもとで、１５４７年～１５５２年頃アヴィニョンでアエミリウス・フェッレトゥス Aemilius Ferretus（Emilio Ferreti１４８９－１５５２．７．１４）のもとで法学を修めたらしい。また医学への関心もあり、パリで解剖に参加し、イタリアで医者を訪問したとも書いている。このイタリア滞在は、ユリウス三世教皇の時代との記述から、１５５０年～１５５５年と推定されていて、カンブレー司教ジャン＝ジャック・ド・カンブレーJean-Jacques de Cambrai に秘書として同行した。東方特使であったこの司教とともにドイツにも旅をしたと思われる。１５５５年頃パリに戻り、『ケリドニウス・ティグリヌスの物語』で述べるところでは、ギリシア語を学んだ。１５５６年に初めての作品『ケリドニウス・ティグリヌスの物語』*L'Histoire de Chelidonius Tigurinus* を、以降も引き続いて自作を委ねることになるパリのヴァンサン・セルトナ Vincent Sertenas から出版する（特認は１５５６年８月５日付、刷了は１５５６年８月８日）。この書は１５５９年に一部を書き換えて第二版が出る（１５５９年１１月１８日刷了）。１５５８年には、マルグリット・ド・ナヴァールの『エプタメロン』となる作品を『幸せな恋人たちの物語』*Histoires des amans fortunez* のタイトルでジル・ジル Gilles Gilles から出すが（特認は１５５８年８月３１日付）、いかなる経緯でマルグリットの写本がボエスチュオーの手に入ったかは解明されていない。ともかく全６７話で実際の作者名（マルグリット・ド・ナヴァール）が記されていないこの版に、マルグリットの娘ジャンヌ・ダルブレが立腹して、ボエスチュオー版を破棄させ、クロード・グリュジェ Claude Gruget に新版を求め、『エプタメロン』*Heptaméron des nouvelles* として全７２話が出版された（１５５９年４月７日刷了）。このスキャンダルにもめげずというべきか、１５５８年から１５６１年にかけて、著作の最盛期を迎える。即ち１５５８年に『世界劇場』*Le Théâtre du Monde* と『人間の卓越と尊厳に関する小論』*Bref Discours de l'excellence et dignité de l'homme*（特認はともに１５５８年７月１日付）を世に送り、『驚倒すべき物語集』序文によれば、アウグスティヌスの『神の国』の翻訳も計画していた。さらに１５５９年には『悲劇的物語集』*Histoires tragiques* を刊行する（特認は１５５８年（旧制度）年１月１７日付）。この年から翌年にかけてイングランドに渡り、エ

Honoré Champion, 1977 ; *Pierre Boaistuau's* Histoires tragiques : *A study of narrative form and tragic vision,* University of North Carolina Press, 1979.

[6]Stephen Bamforth, Introduction aux *Histoires prodigieuses*, Droz, 2010.

リザベス女王にも謁見したと考えられているが、この間の事情はBamforthの前掲研究によりかなり明らかとなった。それによれば、同年に刊行した『悲劇的物語集』の最初の折丁のみを新しく印刷し、献辞などを改めたエリザベス一世への特別版[7]を作り献呈している（献辞の日付は１５５９年１０月２０日）。１５５９年１１月１８日～１５６０年１月１日の間に、『驚倒すべき物語集』*Histoires prodigieuses* の写本[8]と『キリスト教王国の教育』*Institution du royaume chrestien* とタイトルを変更した『ケリドニウス・ティグリヌスの物語』第二版[9]をエリザベス一世への献呈版として製作し、１５６０年１月渡英しロンドンに滞在し、エリザベス一世に謁見した。１５６０年２月にはパリに帰還したと考えられる。この際に作成した『驚倒すべき物語集』の写本を大幅に増補して１５６０年に刊行したのが、ボエスチュオー生前の最期の著作となった（１５６０年６月１８日刷了）。シモナンが発見したルネ・ド・リウーRené de Rieux に関する証書が示すように、１５６６年７月４日から８月３０日の間に死亡し、ラ・クロワ・デュ・メーヌ La Croix du Maine の『フランス書誌』*Les Bibliothèques françoises* によれば、サン・テチエンヌ・デュ・モン教会近くの「学生墓地」cimetiere des Ecoliers に埋葬された[10]。１５７２年にはボエスチュオーの名で『カトリック教会迫害史』*Histoire des persecutions de l'église chretienne et catholique* がヴァンサン・ノルマン Vincent Norment から刊行されている。

３．『悲劇的物語集』

シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の原典の一つとも目される一編を含む『悲劇的物語集』は、イタリア、ロンバルディア（今日ではピエモンテに含まれる）のカステルヌオーヴォ・スクリヴィア Castelnuovo Scrivia 生まれの、ドミニコ会士であったマッテオ・バンデッロ Matteo Bandello（１４８４－１５６１）の『ノヴェッレ』*Novelle* から６編を選び、フランス語に翻訳した作品である。バンデッロの全２１４話からなる作品は、初めの三巻が１５５４年ルッカで出版され（それぞれ５９話、５９話、６８話を含む）、最終の第四巻（２８話）は１５７３年にリヨンで死後出版されている。ボエスチュオーのこの作品は、スチュレル René Sturel も指摘するように、翻訳よりはむしろ翻案と言ったほうが相応しいが[11]、１５５９年ヴァンサン・セルトナから初版[12]が刊行された後、引き続いて出版されたベルフォレの『続悲劇的物語集』*Continuation des Histoires tragiques* の１２話の新訳と合本され、同年の内にジル・ロビネ Gilles Robinet から全１８話の版として刊行され、その後ベルフォレの手で次々と

---

[7]アメリカ、ワシントンの Folger Shakespeare Library PQ 4606 Z45 1559 Cage。
[8]ロンドン　Wellcome Library for the History and Understanding of Medicine, wester ms.136.
[9]ケンブリッジ大学 Emmanuel College Library, S16.4.8
[10]La Croix du Maine, *Les Bibliothèques françoises*, éd. Rigoley de Juvigny, 1772, t.II, p.256.
[11]René Sturel, *Bandello en France au XVIe siècle,* 1918 (Slatkine reprints, 1970), p.2. <<*Histoires tragiques*, la traduction ou l'adaptation de six nouvelles assez longues >>.
[12]*Histoires tragiques　extraictes des oeuvres italiennes de Bandel, & mises en nostre langue Françoise, par Pierre Boaistuau surnommé Launay, natif de Bretaigne.* A Paris, Pour Vincent Sertenas tenant sa boutique au Palais, en la galerie par ou on va à la Chancellerie : Et à la rue neufue Nostre dame, à l'enseigne S.Iean l'Euangeliste. 1559. Auec Priuilege.

刊行された全七巻からなる『悲劇的物語集』の第一巻を構成することになる。こうした合本も併せて１７世紀初頭までに少なくとも２０版以上[13]が刊行されており、当時広く読まれたことが窺われる。

日本では極めてなじみのない作品であるから、まずバンデッロとの作品との対応と梗概を記しておこう。

第一話　　バンデッロ第二巻第３７話

イングランド王エドワード三世はソールズベリー伯夫人アエリプスを恋する。伯の死後ロンドンの父リチャード・オブ・ワーウィック伯のもとに戻ったアエリプスにさらに使いを送り、手紙を書いて迫るが、色よい返事がもらえぬために、さらにリチャード伯に助力を頼み、それも効果がないと見ると、力ずくで奪おうと決め、その前に最期に母親のもとに使いをやり、その意向を知らせる。母親の懇願に負けてアエリプスは王の宮殿に伺候するが、王に自分の望むことをしてくれるよう誓いを求め、王が誓約すると、剣で殺すよう求め、さもなくば隠し持っていたナイフで自刃する、と迫る。これに対して王はアエリプスに結婚を申し込み、アエリプスはイングランド王妃となる。

第二話　　バンデッロ第一巻第１０話

トルコのスルタン、メフメットはコンスタンチノープルを攻略し、略奪の獲物のギリシア娘イレネアに三年間夢中になり、政治を疎かにするが、乳兄弟ムスタファの諫言により、廷臣を呼び集めて、その面前でイレネアの首をはねる。

第三話　バンデッロ第二巻第９話

ロメオとジュリエッタの物語。ヴェローナのモンテッキオ家の若者ロメオは、二年前から恋している女性から一顧だにされないので、友人の忠告に従い、他の女性を求めて、モンテッキオ家の宿敵であるカペレット家の仮面舞踏会にやって来て、その家の娘ジュリエッタと知り合い、互いに恋しあう。ジュリエッタの愛を得るために、ロレンツォ修道士の立会いで秘密結婚して、ジュリエッタの家で結婚を完遂する。両家の諍いの際、はずみでジュリエッタの従兄弟テバルドを殺してしまったロメオはヴェローナを追放されるが、その間にジュリエッタは父にパリス伯との結婚を決められてしまい、追い詰められたジュリエッタがロレンツォ修道士に相談すると、修道士は、４０時間ほど眠らせる薬物により、死んだと思われ埋葬された後、ロメオと掘り返してヴェローナを脱出するという手段を授ける。ジュリエッタは埋葬されるが、手違いでロメオには計画が知らされず、ジュリエッタが死んだと思うロメオはヴェローナに戻り、掘り返したジュリエッタの前で毒により息絶える。眠りから覚めたジュリエッタはロメオの後を追い、剣で胸を刺し死ぬ（バンデッロではジュリエッタは剣で体を刺してではなく、絶

[13]Richard A. Carr, Introduction aux *Histoires tragiques,* pp.LXXIX-LXXX.

望のあまり死亡する)。

第四話　バンデッロ第二巻第１２話

ピエモンテの貴族は、妻が若者と姦通する現場を押さえ、妻に若者を縛り首にさせ、若者の遺体とともに部屋に幽閉する。

第五話　バンデッロ第一巻第４２話

スペイン、ヴァレンシアの騎士ディダコは金銀細工師の娘ヴィオランテを恋し、思いを遂げるために秘密結婚をするが、一年後町の有力者の娘と公に結婚する。裏切られたヴィオランテはディダコをおびき寄せ、女奴隷の助けを借りて、ディダコを殺し、体を切り刻む。

第六話　バンデッロ第二巻第４４話

サヴォワ公妃は話に聞いたスペイン貴族のドン・フアン・デ・メンドサの美貌に恋し、サンチアゴ＝デ＝コンポステーラに詣でる口実で、メンドサに会いに行く。メンドサも公妃の美しさに同じく恋し、二人はサンチアゴ＝デ＝コンポステーラからの帰りに会う約束をするが、サヴォワ公が船で迎えに来たために公妃はメンドサに会わずにトリノに戻る。サヴォワ公が出陣した間留守を任されたパンカリエリ伯が公妃に言い寄るが、拒絶され、甥を騙して公妃の部屋に忍び込ませ、公妃が姦通を犯したと思わせ、公妃の部屋を急襲し、甥を殺し、公妃を取り押さえる。一年と一日の間に無実を証明する挑戦者が現れなければ公妃は火炙りになると決められ、公妃はメンドサに助けを求めるが、折悪しく町に攻囲されていたメンドサは断る。その後思い直したメンドサはトリノに向い、神父に変装して、公妃から告白を聞き、公妃の無実を確信する。決闘でパンカリエリ伯を倒してメンドサは身分を明かすことなくスペインに戻る。サヴォワ公が死亡し、公妃が兄のイングランド王のもとに帰ると、メンドサがスペイン王子とイングランド王女の結婚の使節として派遣されてきて、公妃と再会する。助けを断られたと思う公妃はすげなくするが、告白の際に与えたダイアモンドにより、助けたのがメンドサだと分り、二人は結婚する。

現在まで『悲劇的物語集』の個別研究としては、先に経歴を述べる際に挙げた Carr のものしか存在しないようである。Carr はそこで、各話を長さにより「悲惨な話」tragical tale（第二話、第四話、第五話）と「感傷的話」sentimental tale（第一話、第三話、第六話）に二分し、結末、筋の展開、人物の提示法、主題、文体などの違いを指摘し、さらに『世界劇場』から『驚倒すべき物語集』の流れでこの作品集の意味を把握することを試みている。文体などの分析には見るべきものも多いが、話を二分するやり方はあまりに強引にも思われ、第三話の解釈などには疑問も残る。

以下の我々の検討では、ボエスチュオーが読者への緒言で「この書に悲劇という表題を付し

た」<< j'ay intitulé ce livre de tiltre Tragique >>[14]と述べている、バンデッロから選んでまとめたこの集成の意図を、原典たるバンデッロの『ノヴェッレ』の話との比較も行いながら、集成全体として理解すべく努めたい。

A.形式

話の内容の分析に入る前に、バンデッロとボエスチュオーの集成の形式上の相違に、ごく簡単に触れておこう。バンデッロの『ノヴェッレ』おいては、各話はそれぞれ献辞が付されており、そこで各話が、だれによって、いつ、どこで、だれに対して、語られたかが述べられ、バンデッロはこのようにして設定された具体的状況で聞いた話を書き留めたという体裁をとっている。即ちボッカッチョのような全体を包み込む枠組ではないが、一種の枠組が各話ごとに作られ、枠物語の形式をとり、各話の話し手とそれを再現する語り手たるバンデッロは一応区別されている。各話の中に現れる脱線などは語り手たるバンデッロの見解と見なすべきものも多いが、枠組を設定することで、各話は各話し手の観点を反映したものとひとまずは見なせることになろう。これに対してボエスチュオーの集成にはこうした枠組は存在せず、各話の頭には話の要約がおかれているだけで、その話が語られた状況などは全く述べられない。その結果各話の語り手は編者たるボエスチュオーと区別されず、実際編者は「私は淫蕩な恋愛の餌食となり自分たちの名誉にあまり鷹揚な女性は心の内に刻まれたこの貞潔の肖像模範を持つことを望みたい」[15]などと、「私」として出現し、バンデッロの献辞でも見られたが、物語の読みの方向を一層支配することになっている。また各話が語られた状況が記述されないのは、ボエスチュオーの話から口承性を奪うことになろうし、この変化は、クレ Henri Coulet の指摘するコントとヌーヴェルの相違[16]に対応するとも言えよう。

B.テーマ

先の話の梗概が示すように、六つの話は結末が死で終わるものと、結婚で終わるものがあり、全て話が不幸に終わる訳ではない。しかし六つの話に共通する主題があり、それは恋愛 amour である。ところでこの恋愛はボエスチュオーの集成ではどのように把握されているのか。ソールズベリー伯夫人を恋し、その思いが受け入れられないエドワード三世が、アエリプスの父伯に打ち明けるのは次のような状態である。

---

[14]Pierre Boaistuau, *Histoires tragiques*, édition critique publiée par Richard A. Carr, Honoré Champion, 1977, p.7. 以下本論での『悲劇的物語集』からの引用は全てこの版により、*HT* の略号で示す。

[15]*HT*, p.9. << Je vouldrois que celles qui se donnent en proye à l'amour lascif et qui sont par trop liberales de leur honneur, eussent (...) ce portraict et exemplaire de chasteté gravé en l'interieur de leurs cueurs ; >>

[16]Henri Coulet, *Le roman jusqu'à la Révolution*, Armand Colin, ©1967, p.134. <<*La nouvelle* s'est séparée du conte, selon la distinction qui est encore respectée, bien qu'elle n'ait jamais été codifiée : le conte traite des sujets plaisants, il est l'œuvre de fantaisie, il recourt à l'invraisemblable, il ne perd jamais son caractère oral ; la nouvelle traite des sujets sérieux, sentimentaux ou tragiques, elle raconte des événements vrais ou du moins vraisemblables, elle perd le caractère de narration orale qui ne lui est plus essentiel. Le conte ne survivra, comme nous l'avons vu, qu'en se métamorphosant complètement ; la nouvelle occupera une place de plus en plus grande dans le genre romanesque, *histoire tragique* à la fin du XVIe siècle, *nouvelle française* au XVIIe siècle, avec toute sorte de variété. >>

「私はパッションに攻撃され、それに打ち倒され、早く助けられないなら、かつて人が耐えた最も絶望的な死にしか避難場所をもたないから。そして今やよく分る。理性で感覚を制御し、手に負えない欲望に連れ去られるままにならない人だけが幸せだと。その点で私たちは獣と異なり、獣は本能にのみ導かれ、欲求が導くところに区別なく急ぐが、私たちは理性の測りで行動を摂理とともに抑制することができ、そうすべきで、道を踏み外すことなく衡平と正義の道を選ぶ。そして時に弱き肉に屈するなら、自分たち自身だけを咎めるべきで、物事の移ろう陰と偽りのうわべに欺かれて、私たちに準備された穴に落ちる。そして私がここで述べることは明らかな理由がないことはない。私が今自身で体験しているようにだ。私は途方もない情動にあまりに長い手綱を緩め、正しい道から引き離され、裏切られて欺かれた。しかし引き返すことも、正しい道を取ることも、私を害することに背を向ける術もなく、それもできない。そのために私は今、不幸で惨めだが、深い森に獲物を追って、入った道を見出すことができずに、むやみに至る所に突進する人に似ていると認める。しかし跡を辿ると思いながら、さらに遠ざかり、とうとう道に迷ったままなのだ。」[17]

バンデッロの原作でこれに対応する箇所は次のごとくであった。

「私はパッションにこのように攻撃され、打ち倒されたと感じ、短い間に何らかの治療薬が与えられないと、それは私をかつて人が知りえた最も絶望的な死に確実に導くだろうから。実際理性のはみで自分の感覚を制御し、破目をはずした欲望に引きずられない人は幸せと言える。そしてこれとは異なる判断をする者は、人間ではなく、むしろ理性を欠いた獣と言うべきだと私はみなす。この点だけで私たちは獣と異なるからで、獣はすべてを本能に引っ張られて行い実行し、すべてにおいて欲求に従う。しかし私たちは理性の測りで私たちの行為を抑制することができ、そうすべきで、最も正しく最も正義に合うと思われることを選ぶことができ、そうすべきである。そして時に正しく本当の道から逸れるが、罪はただ私たちのものであり、

17. *HT*,pp.23-24. << car je suis tellement combattu de mes passions que, surmonté d'icelles, je n'ay refuge qu'à la plus desesperée mort qu'oncques homme endura, si en brief je ne suis secouru ; et congnois bien maintenant que celuy seul est heureux qui avecques raison peut gouverner ses sens sans se laisser transporter à ses efferenez desirs; en quoi nous differons des bestes, lesquelles, conduites seulement du naturel instinct, se precipitent indifferemment où leur appetit les guide, mais nous avec la mesure de raison pouvons et devons mederer noz actions avec telle providence que sans desvoyer nous elisions le sentier d'équité et de justice; et si quelque fois la chair infirme succombe, nous n'en devons accuser que nous mesme, qui deceuz par une ombre fuyarde et faulse apparence de choses, trebuchons en la fosse que nous estions preparée. Et ce que je deduis icy n'est sans une tresmanifeste raison, comme je l'exprimente maintenant en moy-mesme qui, ayant lasché la bride à mes affections desordonnées, ay tiré du droit chemin et trahistrement deceu; et neantmoins je ne sçay ny ne puis m'en retirer, ny prendre la droicte voye, ou tourner le dos à ce qui me nuist, dont maintenant, infortuné et miserable que je suis, je me recognois estre semblable à ceuly qui, poursuivant sa proye par l'espoisseur d'un bois, s'eslance indifferemment par tout sans qu'il puisse retrouver le sentier par lequel il estoit entré; ains tant plus il cuide suyvre la trace, il s'en eslongne plus avant, demeurant à la fin intrinqué.>>

私たちはうわべの偽りの喜びに魅惑され、無軌道な欲求によき道確実な道から引き離され、深淵に頭からまっしぐらに飛び込む。私は哀れだ、三倍も。これらすべてが分り理解していて、どれほどありあまるほど私の無軌道な欲求が道から引き出すことを知っているが、引き返し、本当の小道に戻ることも、この錯乱した考えに背を向けることもできない。「できない」と言い、「欲しない」と言うべきだろう。いやむしろ望むだけで、私のパッション、欲求、規制されない望みに先に運ばれるままで、不適当な欲望の抑制を緩め、もう引き戻すことはできない。」[18]

今パッションととりあえずそのままカタカナで置き換えたが、この語は『ロベール大辞典第二版』[19]に示されるように、「苦しみ、受難；情感；情念；熱愛；情熱；偏見；熱意」などの意味がある。そして私たちに馴染みの、近代の「情熱」という肯定的積極的な意味合い（『ロベール大辞典第二版』では１７世紀初頭からの意味とされている）で流布する以前は、『フランス語文化辞典』でアラン・レイが指摘する通り、「苦しみ」、「激しい感情」、「受動性」を含意しており[20]、それはイタリア語でも同様である。

---

[18] Mattteo Bandello, *Le Novelle*, a cura di Gioachino Brognoligo, Gius. Laterza & Figli, 1911, volume terzo, pp.298-299. <<che da le mie passioni cosí combattuto e vinte mi sento che, se a quelle alcun compenso non è in breve dato, elle certissimamente a la piú disperata morte che mai uomo facesse mi condurranno. Beato veramente dir si può colui che col freno de la ragione i sensi suoi governa, né da le sfrenate voglie trasportar si lascia. E chi altrimenti fa giudicio, io tengo che non uomo, ma piú tosto animale senza ragione si debbia dire, ché per questo solo siamo noi da le bestie differenti, imperò che elle tutto quello che fanno, tratte dal loro naturale istinto adoperano e mandano ad essecuzione, e seguitano in tutto l'appetito. Ma noi con la misura de la ragione possiamo e debbiamo l'azioni nostre misurare, e quello eleggere che piú dritto e conforme al giusto ci pare. E se talora del destro e vero camino erriamo, la colpa pure è nostra, che invaghiti d'un apparente e falso diletto ci lasciamo al disordinato appetito fuor del buon sentiero e sicura via cavare, andando poi percipitosamente a dar del capo in profondi abissi. Misero me, e tre volte misero,che queste cose tutte veggio e comprendo, e conosco quanto strabocchevolmente fuori di strada l'appetito mio disordinato mi tirí, e non so né posso ritrarmi e sul vero calle ritornare e a questi folli pensieri volger le spalle! Dico <<non posso>> e dir deverei <<non voglio>>: anzi pur vorrei, ma sí innazi mi sono da le mie passioni, dai miei appetiti e da le mie mal regolato voglie lasciato trasportare, e sí ho allentato il freno ai miei disconvenevoli disiri, che a me piú ritrarlo non vaglio. >>

[19] *Le grand Robert de la langue française* , Deuxième édition dirigée par Aain Rey ©2001 Dictionnaires Le Robert- VUEF, Tome 5, pp.323-326, <<passion 1. Vx. (Poét, ou archaïque).Souffrance. 2. (V.1265, et jusqu'au XVIIIe) Vx. État ou phénomène affectif, agitation << de l'âme selon les divers objets qui se présentent à ses sens >> (Furetière). 3. (V. 1155) Cour. << Tendance d'une certaine durée, accompagnée d'états affectifs et intellectuels, d'iamges en particulier, et assez puissante pour dominer la vie de l'esprit, cette puissance pouvant se manifester soit par l'intensité de ses effets, soit par la stabilité et la permanence de son action >> (Lalande). 4. (V. 1279) Specialt. Cour. Amour puissant, exclusif et obsédant. 5. (Déb. XVIIe) Vive inclination vers un objet que l'on poursuit, auquel on s'attache de toutes ses forces. 6. Affectivité violente qui nuit au jugement. 7. Ce qui, dans une œuvre, est le signe, l'indice de la sensibilité, de l'enthousiasme de l'artiste. >>

[20] *Dictionnaire culturel en langue française,* sous la direction de Alain Rey, ©2005 Dictionnaires Le Roberte-SEJER, Tome III, p.1418, << Que ce soit par la forme identique issue du latin *passio,* dérivé de *pati* << souffrir >>, et qui correspond au *pathos* grec – le français *passion*, l'italien *passione*, l'anglais *passion*– ou, par le sens – l'allemand *Leidenschaft*, dérivé de *leiden*<< souffrir >> –, la double valeur des mots de la passion, en plusieurs langues, associe la souffrance subie à l'<< emportement >> d'un sentiment vif.Cette réduction du dynamisme psychique à une violence passivement éprouvée n'est sans doute pas universelle, mais elle marque profondément les cultures occidentals. Déjà en latin, *passio* est souffrance, douleur, malade, accident naturel, mais aussi << affection >> de l'âme, comme on disait, et même, le << passif >> des grammaires.

(...)

Pourquoi, en maintes langues, ce mot ? Parce qu'en elle nous sommes *passifs*. Nous la subissons, la souffrons (ce qu'exprime *patior* en latin, *paskhô* en grec) ; la pssion est le contraire de l'action. Le latin *passio* et le grec *pathos* couvrent une large palette de sens, qui vont du fait de *supporter* quelque chose à ce qui << se passe >>,

バンデッロにおいてもボエスチュオーにおいてもエドワード王はパッションに捕えられた者として提示されている。ボエスチュオーの版に即して見れば、リチャード王の恋愛はパッションとして発生し[21]、アエリプスもそのように考え、王がソールズベリー城を去るときには、「神にこのように王を苦しめる官能の情念を抑制してくださるよう祈る」[22]。アエリプスが寡婦となり、ロンドンの父伯のもとに戻ると、王は婦人たちの好む催しを開催するが、「自分の情念を偽装することも隠すこともできず、いつも伯夫人により愛着を示した。」[23]先の引用に見たように王に自分の娘への恋を打ち明けられたワーウィック伯は、「情念に捕らわれた王」[24]に適切な返答を直ぐにはできないでいたが、一旦口を開けば、「あなたはいつでも情念から解放されていたと私には思われた」[25]のにと非難する。こうした伯の非難を正当と思いながらも、王は「情念に我を忘れていて」[26]アエリプスを力ずくで奪うという宮廷人の計画を許す。このように王は、自身で自覚もしているが、アエリプスやワーウィック伯からもパッションに捕えられていると見なされており、先の引用にあるように、そのために理性で性的欲望を抑えることができなくなり、なす術も分らないと、途方に暮れている。さらにエドワード王は政治も疎かにし、聴聞にも出ない。恋愛の情念に捕らわれ、理性で自らの行為を抑制できなくなった王は、アエリプスを追い詰め、この女を殺すか、自死に至らせるかという状況に陥った。一方的に恋を迫られ、力で身を奪われそうになるアエリプスの悲劇であるが、こうした行為を不当不正だと認識しながら、パッションに取り付かれて、やめることもできぬ、エドワード王の悲劇でもある。まさにこうした状況こそ犯罪や殺人が生じる悲劇的状況である。そしてあることがなければ、エドワード王がアエリプスを殺すか、アエリプスが自死するかの結末を迎え、文字通りの悲劇となったのである。

ボエスチュオーの第一話の元となったバンデッロの話でも事情は同じである。ボエスチュオーの第一話で passion(s) は１０回(エドワード王に関する場合９回)[27]、passionner(passionné) は２回（２回[28]ともエドワード王に関する）使用されていたが、バンデッロの話でも passione (passioni)は１３回（エドワード王に関する場合７回）[29]、appassionare (appassinato)は４回

---

l'événement, en passant par la souffrance, la maladie du corps, l'affection, le trouble de l'âme, l'accident ou la perturbation dans la nature. En tous ces emplois, le mot grec et et le mot latin se colorent souvent d'une nuance funeste. On désigne par *pathos* plutôt l'accident regrettable que l'événement indifférent, plutôt la tristesse que la joie; mais selon l'emploi technique, chez les phoilosophes en particulier, cette nuance péjorative est négligée au profit de l'idée de passivité. C'est ainsi l'événement qui survient de l'extérieure, hors de la volonté d'un sujet ainsi mis en état de *passivité* – contraint à la *patience*. (...)

[21]*HT*, p.15 .「あるいは自分の情念を伝えようと考え」<< faisant estat ores de luy communiquer ses passions >>.

[22]*HT*, p.19. << elle priroit Dieu (...) luy faire la grace de dompter ceste passion charnelle qui le tourmentoit ainsi. >>

[23]*HT*, p.20. << il ne pouvoit si bien deguiser ou masquer ses passions qu'il ne se monstrast tousjours plus affectionné à la Comtesse. >>

[24]*HT*, p.27. << Roy passionné>>

[25]*HT*, p.29. << vous m'avez tousjours semblé libre de passions >>

[26]*HT*, p.38. << yvre de sa passion >>

[27]*HT*, p.9; p.15; p.19; p.20; p.23; p.26; p.29; p.38 2 回; p.42.

[28]*HT*, p.27; p.33.

[29]*Op.cit.*, p.288; p.292; p.294 3 回 ; p.298; p.299; p.300; p.302; p.306 2回; p.325; p.337.

（４回[30]ともエドワード王に関する）使用されており、両者とも王がパッションに捕らわれていたと説いている。バンデッロでは「それに対して恥ずかしいと思うと地上の好色な愛に耐えることができず、(...)、誠実で本当の愛に席を譲った」[31]と愛を二元的に考えて、「王は過度の欲望を抑え、恋の情念を抑制できたので、劣らぬ栄光を与えるべきだ」[32]と結んでいた。ボエスチュオーにおいては、恋愛 amour はもっぱら性的欲望と結びついたものとして理解されているが、パッションとされていることは変わりない。

このようにボエスチュオーの第一話でも、原典のバンデッロの話でも、エドワード王はパッションがもたらしかねない悲劇的状況に置かれていた。しかしボオエスチュオーでは、バンデッロと異なり、全ての物語の全ての主要登場人物がこのパッションに捕えられていた者として表現されている。第二話のトルコのスルタン、メフメットの「恋の情念は三年間引き続き」[33]、民衆の不平、近衛兵らの軽蔑を招き、反乱の気配が漂い、ムスタファに「あなたの情念に捕らわれた心には理性や助言は余地がありえない」[34]と指摘される。第三話は後に詳しく検討しよう。第四話のピエモンテの貴族の妻と近隣の貴族の若者も「時の経過とともに自分たちの情念をうまく制御し、このような慎み深さで抑制することができず」[35]、貴族の罠に嵌って、情事の最中を取り押さえられ、悲惨な結末を迎えた。第五話のディダコはヴィオランテを口説く手紙で「私の愛情のこもった調子、悲しい言葉、熱いため息が熱愛の残りがどのようなものかを手紙以上によりよくあなたに確かに知らせることができるために」[36]会って話したい、と書いており、秘密結婚の後、裏切られたことを知った「ヴィオランテは過度に激情に捕らわれ」[37]、残酷な復讐を考え、実行した。第六話ではサヴァワ公妃はメンドサの美貌を噂に聞いただけで恋してしまい、侍女のエミリーは医師アッピアーノに「公妃の病の起源、苦しみの症状を理解」[38]させることになり、公妃と会ったメンドサは「それは私の熱愛をとても燃え立たせて一日に千回も死ぬ思いです」[39]と告白する。さらにサヴォワ公の留守に総代理となったパンカリエリ伯も、公妃を恋してしまい、「自らの情念の大きさを考えて、公妃の厚遇なしでは長く命を続けることができなかった」[40]が、公妃に拒まれ、愛情が憎悪に変り、甥を犠牲にして、公妃を陥

---

[30]*Op.cit.*, p.290; p.294; p.303; p.307.
[31]*Op.cit.*, p.333. << il cui pudico cospetto amor terreste e lascivo non potendo sofferire, (...), a sincero e vero amore ha dato luogo. >>
[32]*Op.cit.*, p.337. << non minor gloria dar se gli debbia che egli sapesse sí bene i suoi disordinati appetiti regolare e sovrastare a le sue amorose passioni >>
[33]*HT.*, p.50. << ceste passion amoureuse par l'espace de trois ans continuez>>
[34]*HT.*, p.53. << sans que raison ou conseil puissent trouver place en vostre cueur passionné>>
[35]*HT.*, p.126. << par traict de temps ils ne peurent si bien maistriser leurs passions ne les moderer par telle discretion >>
[36]*HT.*, p.141. <<à fin que mes affectueux accens, tristes paroles et soupirs ardens vous puissent mieux acertener que le papier quel est le reste de ma passion >>
[37]*HT.*, p.150. << Violente passionnée outre musure >>
[38]*HT.*, p.180. << luy faire entendre l'origine de la maladie de ma dame la Duchesse, les symptomes de sa passion >>
[39]*HT.*, pp.188-189. << ce qui renflamme tellement ma passion que je meure mille fois le jour >>
[40]*HT.*, p.194. << eu egard à la grandeur de sa passion, il ne pouvait longuement prolonger sa vie sans la faveur de ses bonnes graces >>

れた。

第三話はより詳しく検討しよう。結末から見れば、悲劇に違いないが、Carr はハッピーエンドである第一話、第六話と並べて「感傷的話」とし、ロメオとジュリエッタの物語は「もはやエゴイスチックなパッションを歌うのではなく、正当で純粋な恋愛を栄光あらしめている」[41]とするからである。この解釈は私たちにはあまりにロマンチックに思われる。そもそもこの話ほどパッションに彩られたものはない。すでにバンデッロ版でもロメオもジュリエッタもパッションに捕らわれていた[42]。ボエスチュオー版ではこの傾向は一層強められ、passion の使用は１３回[43]、 passionné の使用は６回[44]に及び、すべてロメオかジュリエッタに関している。即ちロメオはある女性に恋したが、一顧だにされず、或る友人の別の女性が情念を忘れさせる、との忠告に従って、カペレット家の仮面舞踏会に赴いたのである。ロメオは「非常に変った熱愛を感じ」[45]、ジュリエッタも「自分の熱愛を打ちあけることのできる」[46]侍女に自分の気持ちを告げる事態となる。その後の展開は、ロメオにロレンツォ修道士の計画を知らせるはずのアンセルモ修道士が、マントヴァのフランチェスコ僧院でペスト患者が出たため、足止めされ、ロメオに知らせが行かなかった、というところまでは、バンデッロ版でもボエスチュオー版でも大きな違いはない。その後の展開は両者でかなり異なる。バンデッロ版では、ピエトロによりジュリエッタの埋葬を知らされると、ロメオは自らを罵った後、手元の剣で自殺しようとするが、ピエトロに止められる。しかしジュリエッタを失ったと信じていたので、生き延びようとは考えないが、そのことは秘してピエトロを先にヴェローナに戻し、ジュリエッタの墓を開ける準備をさせる。その夜ジュリエッタの墓に向うと、ピエトロの手を借りて石棺を開け、死んだように横たわるジュリエッタを再び見ると、毒水を飲んで自殺を図る。ロメオがジュリエッタの体を抱きながら死を待っていると、薬の効き目が切れたジュリエッタは目を覚まし、ロメオに気づくが、ロメオはすでに毒で死にかけている。ロメオから事情を聞かされたジュリエッタが嘆く中、ロレンツォ修道士も様子を見に来るが、二人の前でロメオは死んでいく。ジュリエッタは気絶するが、意識を取り戻すと一層嘆き悲しみ、ロメオの後に続くと言い、堅く決意して死んでいく。その後通りかかった衛兵がことをヴェローナ領主に知らせ、事件が明らかになる。以上のように、ジュリエッタは死んでいくロメオを目にして、自らは苦しみで死ぬ。

これに対してボエスチュオーは次のように結末を変更した。ジュリエッタの埋葬の知らせを聞くと、ロメオは「精神は情念の犠牲に苦しみ、すぐに肉体を捨てるかのように思われた」[47]が、

---

[41] Carr, Introduction aux *Histoires tragiques*, p.LVI. << Il ne s'agit plus de chanter une passion égoïste, mais de glorifier un amour légitime et pur. >.

[42] Bandello, *Le Novelle*, Gieu. Laterza & Figli, 1910, volume secondo, p.387.<< Certo è che alucuna gran passione la tormenta, >>「確かに何か大きな情念がジュリエッタを苦しめた」 ; p.400.<< Romeo (...) a lasciarsi vincer de le sue acerbe passioni e dar luogo ai malavagi e disperati pensieri, >>「ロメオは（. . .）激しい情念に打ち負かされ、悪く絶望的な考えを引き起こすままになり」

[43] *HT.*, p.65 2 回 ; p.66, p.67, p.69, p.77, p.85, p.87, p.90, p.91, p.92, p.108, p.112.

[44] *HT.*, p.69, p.79, p.81, p.93, p.116, p.119.

[45] *HT.*, p.69. << Rhomeo souffroit une si estrange passion >>

[46] *HT.*, p.77. << elle peust faire ouverture de ses passions >>

[47] *HT.*, p.108. << il sembloit que ses esprits, ennuyez du martyre de sa passion, deussent à l'instant abandonner son

強い恋心ゆえにジュリエッタの傍らで死ねれば、と幻想を抱く。自ら薬屋に出向き強い毒を手に入れた後、ピエトロをヴェローナに先に送り、その夜ジュリエッタの墓に行き、墓を開いた後、ピエトロを外に待たせて、一人横たわるジュリエッタと対面して、毒を飲み、ジュリエッタの上に倒れて息絶える。ロレンツォ修道士は様子を見に来て、墓に灯りが点っているのに気づき、ピエトロと墓に入り、ロメオが死んでいるのを発見する。その時ジュリエッタは目を覚まし、修道士から事情を知らされると、「苦しみに薬を見つけることができると思って」[48]いたのにと嘆き、通りかかった衛兵の物音で修道士とピエトロが場を離れた隙に、ロメオの短剣で自ら胸を突き刺し、息果てる。衛兵が二人を発見し、事態を領主に知らせ、ロレンツォ修道士は公開で尋問されるが、これまでの事情を説明した結果、事の真相が明らかとなり、事件に関与した薬店主らに裁きが下り、「この哀れな熱愛した者たちの二つの遺体は、命を終えた墓に埋葬し続けられていた」[49]。今の要約中に引用した原文からも、ボオエスチュオーがパッションを強調しているのが分るだろう。二人は正当で純粋な恋愛を実践したというよりは、このパッションの犠牲者なのである。

物語の最期に付せられたロレンツォ修道士の弁明、事情の説明についても一言しておこう。この部分は Carr の言う様な無駄に繰り返された物語の要約ではない。何より、筋書きの変更に伴いロレンツォ修道士に自己弁護させる必要が高まった。バンデッロでもボエスチュオーでも、ジュリエッタの死亡偽装が遠因となり、ロメオの自殺を招いたことは間違いがない。しかしこれは不幸な偶然として理解もされよう。そしてバンデッロのようにジュリエッタが苦しみで死んだなら、それはロレンツォ修道士の力の及ぶところではない。しかしボエスチュオーのように、その場を離れた隙に自殺を許したということであれば、まずは殺人者として疑われもしようし、自殺が大罪である宗教の聖職者としての義務も疑われよう。ボエスチュオーは第六話でも、バンデッロ版での、宗教批判とも取られかねない、公妃がサンチアゴ＝デ＝コンポステーラ詣でをする理由として繰り広げられる聖ヤコボ出現の偽装芝居をまったく留めず、宗教への配慮を示している。それゆえロレンツォ修道士の責任を回避するためにもこの弁明、説明は重要であり、また同時に修道士自身の口で「この二人の哀れな熱愛した恋人たち」[50]と形容してパッションを強調してもいる。さらに結婚の問題にも関わるが、これは後に再び検討する。

以上検討したように、ボエスチュオーは物語全体に共通するテーマである恋愛を、パッションで染め上げたのだが、第六話の冒頭ではより端的に次のように述べてもいる。

「普通人間精神を悩ませる最も重大な情念の中で、恋愛はほぼいつでも首位を占め、恋愛は一度だれか高貴な主体に取り付くと、熱を持つ者たちの堕落した性質に従うが、この熱は心に起源を持ち、人体の他の感覚器官に進み、不治となる。」[51]

---

corps.>>

[48] *HT.*, p.112. << pensant trouver remede à mes passions>>

[49] *HT.*, p.119. << les deux corps de ces pauvres passionnez demeuroient enclos au tombeau auquel ils avoient finy leur vie, >>

[50] *HT.*, p.116. << ces deux pauvres passionnez amans>>

[51] *HT.*, p.171.<< Entre toutes les plus griefves passions qui assiegent ordinairement les esprits humains, l'amour a tousjours tenu presques le premier lieu, lequel, depuis qu'il s'est une fois emparé

恋愛を害をなす情念の筆頭として挙げた後、原罪を思わせる堕落した性質に触れ、恋愛の熱が心臓に発し体の各部に及んで不治にするというメカニズムを説明しているが、ここで最も重要と考えられるのは、高貴な人物に取り取り付くこと、あるいは少なくともその場合に問題となることである[52]。ここでは第六話のサヴォワ公妃のことに関連しているが、実はこれは全ての話に当てはまる。第一話のイングランド王、第二話のトルコのスルタン、第六話のサヴォワ公妃とパンカリエリ伯、第三話のヴェローナの名門貴族ロメオとジュリエッタ、第四話のピエモンテの貴族の妻と近隣の若者の貴族、パッションに捕えられるのはこうした身分の人々である。第五話のヴィオランテだけが平民の娘であるが、ボエスチュオーでは、手紙を書くという設定に合わせて、ヴィオランテは読み書きができるとされ、一種の高尚化がなされていると見なされよう。因みにボエスチュオーは身分の低い従者や侍女はパッションに与らせず、ジュリエッタの侍女は事件後の裁きで追放され、バンデッロではヴィオランテとともに斬首された女奴隷は、ボエスチュオーでは金銭ずくで女主人に助力して、事件後逃亡したとされている。

先の引用には何も言及されいないが、これらの人物がパッションの恋愛に陥るのは、ほとんど専ら美によってであり、突然に取り付き、性的欲望を抑制ができなくなる。バンデッロではピエモンテの貴族は６３歳に近づきつつあるのに妻は３５歳位であるとし、またサヴォワ公妃は年配の公と結婚したとし、若い妻が老いた夫に抱いた欲求不満が恋の原因として暗示されているが、ボエスチュオーはこの年齢差を明言しない。

こうして高貴な人々を、パッションとしての恋は突然虜にし、エドワード三世が嘆くように、理性で制御できなくして、好色な欲望に引きずられるままにし、たとえ本人がそれを自覚したとしても、解放されることはなく、そのため正しい活動を疎かにし、最後には死に至る。

『悲劇的物語集』の結末は全てが不幸ではない。第一話と第六話はエドワード王とアエリプス、前サヴォワ公妃とメンドサの結婚により、ハッピーエンドを迎える。こうした結末がボエスチュオーの言う「(たぶん) 悲劇で要求されるものに何事でも対応しない話」[53]であろう。こうし

---

de quelue subject genereux, il ensuit le naturel de l'humeur corrompu de ceux qui ont la fievre, qui, prenant son origine au cueur, s'achemine incurable par toutes les autres sensibles parties du corps humain. >>

[52]バンデッロもボエスチュオーの第四話のもととなった第二巻第１２話で、次のように愛の情念の危険性を述べ、そのメカニズムの一端に触れているが、高貴な人物への言及はない。Matteo Bandello, *Le Novelle*, Gius. Laterza & Figli, 1910, volume secondo, p.433 << Quanto siano grandi e periglioso le passioni de l'amore che il delicato e molle petto fondano le lor radici, oltra che tutti gli scrittori con molto ragioni mostrino quanti mali ne seguano, si vede molto meglio il dí per i vari efffeti di morti ed altri danni che ci nascono, che tutti procede perché l'uomo non sa amare, ma a poco a poco lascia da un fuggitivo piacer velar gli occhi e talmente dal concupiscibile appetito trasportare che volendo poi ripigliar il freno da la ragione e voltarsi a dietro, ha assai che fare e il piú de le volte si vede andar in rovina .>>
「愛の情念はどれほど大きく危険なことか。それは柔らかく繊細な心にその根を置く。全ての作家が多くの議論で、どれほどの不幸がそこから続くかを示すのに加えて、さらに毎日死の様々な結果とそこから生まれる他の災厄のために、人が愛し方を知らないからではなく、徐々にはかない楽しみに目を覆われ、好色な欲望に引きずられるままになり、次に理性の制御を取り戻し、後戻りしようとしても、すでになすべきことがあまりにあり、大抵破滅に進んでしまっているから、全てが生じることがよく分る」

[53]*HT.*, p.7. << laquelle ne respondra en tout à ce qui est requis en la tragedie ; >>

た話は物語集の統一を破りかねないが、それでもボエスチュオーはあえて加えている。それはパッションに捕らわれて悲劇的結果を招いている世界を描くだけではなく、それを回避する手段をも示そうとしたからであろう。恋は好色な欲望として捕えられてはいるが、ボエスチュオーは性的欲望を必ずしも否定してはいない。エドワード王は「伯夫人に長い愛情の利子を厳しく支払わせ、同じような快楽の試みをし、長い求愛の果実を摘んだ人が判断できる幸福と満足を得た」[54]のである。しかしこれには結婚という条件がある。ロレンツォ修道士によれば、ロメオとジュリエッタは「自分たちは結婚していることを、そして、聖職者の立会いのもと結婚を正式のものとするのを神父が気に入らなければ、二人は神様を冒瀆し、同棲で生きざるを得なくなるだろうことを二人とも誓って証言した。」[55]マドレーヌ・ラザールの説明[56]では、当時の教会法では双方が今現在誓えば婚姻は成立し、証人や宗教的儀式は必要でなく、性的結合により結婚は完遂する。しかしボエスチュオーは聖職者の立会いを課しており、ディダコとヴィオランテもヴィオランテの母、兄弟、ディダコの従者、見知らぬ司祭の立会いのもとで結婚した。こうして結婚を宗教的な次元におき、神を前にしての契約としたからこそ、ジュリエッタはパリス伯との結婚が二重婚となり、神にかけた誓いを犯すことになることを恐れたのであり、ヴィオランテはディダコが町の有力者の娘を娶ったのを、重大な誓約違反だと見なして、復讐に及んだ。しかしこの二つの結婚が不幸な結末を招いたのは、それが社会的に正式なものとされない秘密結婚 mariage clandestin であったからである。ジュリエッタの侍女が追放刑となったのは、秘密結婚をロメオの父親に隠したからであり、「この秘密結婚がその時に明らかにされていたら、非常に大きな善の原因であっただろう」[57]。ラザールは前掲書で、当時の秘密結婚をめぐる規制の歴史を簡明に示しているが、まず１５５６年に、アンリ二世は父母の意思、同意に反し、知らぬ間に結婚した子に関する勅令で、秘密婚を無効にはしないが、秘密結婚した子の相続権を奪うことを可能にした。その後１５６３年のトレント公会議で、婚姻公示、証人の存在、両親の同意が義務化され、１５７９年のブロワ王令では、婚姻公示、証人と司祭の存在、主任司祭による記録簿管理が義務化される。こうした規制の流れに沿って、１５８４年ジャン・ベネディクチ Jean Benedicti は『罪大全』で、両親の意に反しての結婚は大罪であると説くまでになる[58]。ボエスチュオーの態度はベネディクチほど厳しくはないが、この規制の流れを反映したと見なすべきであり、エドワード王と前サヴォワ公妃は、自分たちの結婚を社会的に正式なものとして、幸せな結末を迎える。

しかしこうした申し分のない結婚だけが、エドワード王、サヴォワ公妃とロメオ、ジュリエ

---

[54]*HT.*, pp.45-46. << feist payer à la Comtesse les interests rigoureux de sa longue amitié, et avecques tel heur et contentement que peuvent juger qui ont faict essay de semblable plaisir et recueilly le fruict d'une longue poursuitte. >>

[55]*HT.*, p.116. << attestant tous deux par serment qu'ils estoient mariez, et que, s'il ne luy plaisoit solenniser leur mariage en face d'Eglise, ils seroient contraincts d'offenser Dieu et vivre en concubinage.>>

[56]Madeleine Lazard, *Les avenues de fémynie, Les femmes et la Renaissance*, Fayard, ©2001,p.38.

[57]*HT.*, p.119. << ce mariage clandestin, lequel, s'il eust esté manifesté en sa saison, eus esté cause d'un tresgrand bien. >>

[58]Madeleine Lazard, *op.cit.*, pp.38-48.

ット、ヴィオランテの運命を分けるものではない。エドワード王やサヴォワ公妃には幸せに至るもう一つ別の契機がある。サヴォワ公妃はサンチアゴ＝デ＝コンポステーラに公が先回りして来ているのを知るも、あまり喜びもしなかったが、寺院で祈りを捧げる内に次のような思いに捕らわれる。

「公妃は、神様が好色な意思に抵抗されたこと、夫の善良な公の善意に同情されて、公がこのように不実に欺かれるのを許そうとはされなかったのだと認識し始めた。そして大粒の涙を流し、過去の過ちをいたく後悔し始め、魂で良心の呵責に責め立てられるのを感じ、自らに打ち勝ちメンドサとその美貌をすっかり忘れることを決意した」[59]。

バンデッロでは「公妃は自分の恋の道が断ち切られたのが分り、大いに不満であった」[60]と言われるだけで、ボエスチュオーでのように自らの良心を鑑みることはない。良心への言及は、バンデッロと較べてボエスチュオーの大きな特徴で、conscienceの使用はボエスチュオーの『悲劇的物語集』全体で２５回[61]に登るが、典拠となったバンデッロのノヴェッラでは coscienza は一度も使用されない。ブードゥーが言うように、「評判という人を欺く噂よりも、登場人物は良心の裁き、内心の方を選び」[62]、極悪非道とも思われかねないパンカリエリ伯ですら、挑戦者の出現を聞いて良心の呵責を覚えるのである[63]。バンデッロではその場で殺された伯は、すでに罪を犯していたので、ボエスチュオーでも数日良心の疚しさに応ずるために牢屋に送られるだけで助かることはない。エドワード王もサヴォワ公妃もパッションの餌食となり、すんでのところで性的暴行や姦通を犯すところであった。しかし二人は自らの良心の呵責を感じ、実行を免れたのである[64]。こうして二人は最終的な幸福を手にいれるが、神の恩寵や摂理とこの良心の呵責との間に何らかの関係を見たり、ブードゥーのように、「その主人公、エドワード王とサヴォワ公妃が、良心の内に神の声を認め、それを聞くことに同意するからだ」[65]とすることは、先の引用が示すように、第六話については説得力を持つが、第一話でエドワード王が「洗礼の秘跡の尊厳」にかけて誓っているだけでは、十分とは言えないだろう。しかし「この宗教的なものの存在」[66]がバンデッロとボエスチュオーを区別することは確かであり、ボエスチュ

---

[59]*HT.*,p.192. << elle commença à cognoistre que Dieu resisitoit à sa lacsive volonté, et qu'ayant prins compassion de la bonté du bon Duc son epoux, il n'avoit voulu permettre qu'il eust esté ainsi desloyalement deceu ; et pleurant à grosses larmes, elle commença à se repentir amerement de sa faute passée, et se sentant pressée en son ame d'un remors de conscience, gagna sur elle qu'elle se delibera du tout d'oublier Mandozze et sa beauté, >>

[60]Bandello, *Le Novelle,*Gius. Latera & figli, 1911, volume terzo,p. 464. << ma la duchessa si trovò molto discontenta, veggendo troncata la via ai suoi amori. >>

[61] *HT.*, p.21 ; p.33 ; p.44 ; p.52 ; p.53 ; p.90 ; p.97 ; p.98; p.101; p.104; p.116 2 回; p.117; p.148; p.149; p.178; p.192; p.193; p.203; p.211; p.215; p.217; :.221; p.222; p.225.

[62] Bénédicte Boudou, << Formes et representations de l'intériorité dans les *Histoires tragiques* de Pierre Boaistuau >>, *Réforme Humanisme Renaissnce*, n°73 (décembre 2011), p.67. <<Aux bruits fallacieux de la réputation, les personnages préfèrent le tribunal de leur conscience,　leur for intérieur. >>

[63]*HT.*, p.217. << Le Comte de Pancalier, averty de cecy, commença incontinent à sentir un remors de conscience >>.

[64]エドワード王はアエリプスに自害の決意を聞かされ、「良心の呵責に打ち負かされ」<< vaincu d'un remors de conscience >>(*HT.*, p.44)、アエリプスを妻として娶り、王妃にすることを決める。

[65]*Art.cit.*, p.71. <<C'est parce que leurs héros – le roi Édouard, la duchesse de Savoie– reconnaissent dans leur conscience la voix de Dieu et qu'ils consentent à l'écouter.>>

[66]*Art.cit.*, p.71.

オーは結婚を宗教的かつ社会的な事象として重要視している。

C.書き方

紙幅の余裕もないので、最後にボエスチュオーの書き方をごく短く見ておこう。バンデッロの語り方に比べて、ボエスチュオーは各話を主題に沿って、無駄なく展開している。第一話の元となったバンデッロの第二巻第３７話では、恋する者は黙するべきとする主張や、宮廷人に関する話が、エドワード王のアエリプスへの思いという本筋にあまり関係しない脱線として挿入されていたが、ボエスチュオーはこれらを省き、またテムズ川沿いにあるとされていたロンドンでの王宮の描写なども簡略化し、筋の展開を優先している。また同じく第一話で、バンデッロのアエリプスはエドワード王に、自分を殺すか自刃を認めるか迫った後も、王の犯す罪を長々と説くが、ボエスチュオーでは、アエリプスが迫るや、王は良心の呵責に打ち負かされて、アエリプスの意に従う。また先に見たように、バンデッロのジュリエッタは一度気絶した後、再び息を吹き返して、その後悲しみで死ぬが、ボエスチュオーでは、ロメオの死を目にして、嘆き悲しみながらもすぐさま剣を突き立てる。このようにボエスチュオーは出来事を連続して語り、時間を短縮し、理由などは前後に回し、決定的瞬間を間延びさせずに、劇的に描き出している。

さらに悲劇的物語の特徴とも言える残酷さを、ボエスチュオーはバンデッロより、むしろ弱めている。即ちピエモンテの貴族の妻は、６年間閉じ込められるが重病になったので、部屋から出されとされていたのが、ボエスチュオーでは、しばらく腐敗した死体とともにいたがやがて死亡したとされる。バンデッロでは、ディダコは生きたまま、舌を切り取られ、指先を切り取られ、両目を抉られ、体の他の部分を切り取られ、心臓に二、三度ナイフを突き立てられて死んだが、ボエスチュオーでは、胸を突き刺され死亡した後に、目を抉られ、舌を切り取られ、胸を突き刺れると変更された。パンカリエリ伯を、バンデッロは決闘の場で死なせたが、ボエスチュオーは、牢屋に連れて行かれる、とした。これは残酷さを単に述べて教化するのではなく、社会的な措置や宗教的回心を重視しようとするためであろう。

４．終わりに

ボエスチュオーは、悲しい調子の話ばかりではないバンデッロの『ノヴェッレ』から、恋愛を主題とする六話を選び、高貴な人をも破滅に向わせるパッションとしての恋愛が齎しかねない悲劇的状況を描き出した。しかし結末は必ずしも悲劇ではなく、宗教的社会的誓約としての結婚と良心に照らしての改悛による救いをも提示している。社会的規範と内面に従う教化文学 littérature moralisatrice を実現している点が、ボエスチュオーの『悲劇的物語集』の特徴と言えよう。

Étude de Pierre Boaistuau

(1) *Histoires tragiques*

Yoshihiro KAJI

Dans cet article, nous analysons les *Histoires tragiques* de Pierre Boaistuau, la traduction ou plutôt l'adaptation de six hisotires tirées des *Novelle* de Matteo Bandello, principalement du point du vue du thème avec la comparaison des nouvelles-sources du conteur italien. Un thème commun dans tous les six histoires, c'est l'amour, que Boaistuau présente commme << passion >>, terme qui implique la douleur, la vivacité et la passivité. Tous les protagonistes des récits, si généreux qu'ils soient, sont surpris par une fureur amoureuse et souffrent de cette force violente, qui, capable d'aveugler l'esprit, sait faire oublier leurs devoirs comme leurs responsabités à ceux qui en sont les captifs, laisser les emporter par un appétit concupiscible, et puisse conduire à la destruction de l'homme et à la perturbation de la société. C'est là la situation tragique que Boaistuau représente dans ce recueil de récits. Mais il indique aussi à l'homme en proie à la passion un remède pour la maîtriser, qui consiste à sentir un remords de conscience et à << solenniser le mariage en face d'Église >> et célébrer les noces en public. Ainsi le roi Édouard et la duchesse de Savoie ont une fin heureuse. Boaistuau a réussi de fonder en France le genre de l'histoire tragique, mais son œuvre a moins de cruauté que les nouvelles-sources et les représentations de l'intériorité.